新刊紹介

# 『ウクライナ青年兵士との対話』

土橋芳美（著）私家版 2022.7

〈出版の経緯〉

芳美さんから五月十五日、午前、緊張した声で電話があった。

「今朝、滝の音のような激しい泣き声で目が覚めたの。金髪の美しい青年が私のベッドの脇で肩を揺らして蒼白な貌で泣いていた。どうしたの、あなたは誰？　と聞くと、苦痛に満ちた表情で嗚咽しながら『ウクライナの兵士です。今、僕はロシア兵に狙撃され銃弾が内蔵を貫通、あまりの痛さに大きな樹に寄りかかってドクドク血を流している僕の肉体を置いてこうして魂だけ夜空を翔んで気付くと此処に来ていたのです』と言うの」。そのあと青年とのまざまざとした対話が、ざっと告げられた。私は驚愕しながらそれを聴いた。それは夢幻（ゆめまぼろし）といった曖昧なものでなく、彼女にいつも粛々、リアル克明な映像としてやってくる。

芳美さんが祖先の怒り訴求に促されて初めて書いた叙事詩『痛みのペンリウク』*は、北海道新聞文学賞を直ちに受賞、それは仏語翻訳すらされて世界に飛び翔とうと今している。小説集『揺らぐ大地』*も商業出版されて、話題騒然。時の人めいているが、芳美さんにその傲り、微塵もない。今、次の執筆のために瀟洒な札幌での生活をサラリ捨て、ジョン・バチェラーを書く為の祈りの生活、聖書研究に山形に転居して只管（ひたすら）、勤しんでいる。清雅極まりない。本の出版にあたり安藤厚氏のご教示を多々戴いた。著者、編集者の感謝、限りない。

（編集：長屋のり子、本会会員）

A5 判　58ページ、定価（600円＋税）+郵送料

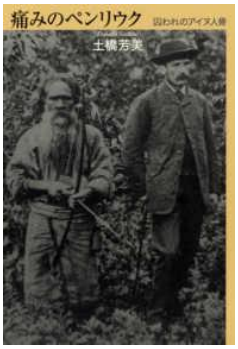
〈好評発売中！〉購入申込み先：サッポロ堂書店　TEL/FAX　011-522-8024

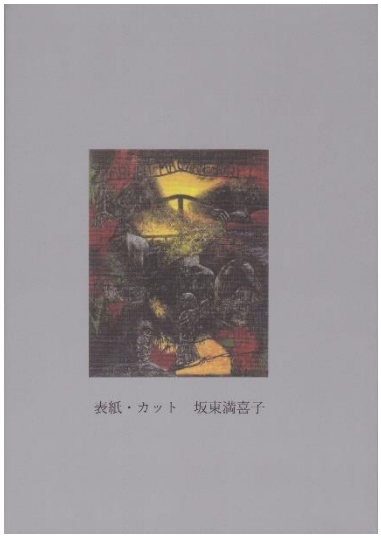
https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=430632588

※『痛みのペンリウク～囚われのアイヌ人骨』土橋芳美著、草風館　2017.3【北海道新聞文学賞詩部門佳作（第51回）】わしらは祈りの民だ　朝に　夕に　カムイ（神）に祈って暮らしてきた―。アイヌ史上の過去から現在にいたる深刻な出来事を語り伝えた長編叙事詩。ペンリウクの遺骨について綴った文章も収録。　https://honto.jp/netstore/pd-book_28387143.html

※『揺らぐ大地』土橋芳美著、藤田印刷エクセレントブックス（JRC 発売 FAX:03-3294-2177 / TEL:03-5283-2230）2022.8

https://www.jrc-book.com/list/fujita.html





新刊紹介

# 長詩『ウクライナ青年兵士との対話』

土橋芳美（著）サッポロ堂書店 2022.7

2022 年 10 月 9 日、ウクライナ大橋爆破―「ついにやってしまった」―これで「ウクライナ戦争」は新しい段階に入ってしまったと思い、私はしばし言葉を失った。「下手人」は誰だか、今のところわからない。例によってプーチン流の自作自演という説もあるし、ウクライナ側の仕業という説もある。しかし、今や、それはどうでもよいことだ。

案の定、翌日からウクライナ全土へのミサイルによる無差別の爆撃が始まってしまった。

「ああすればこうなる」と知りながら、「ああやってこうなってしまった」という、お互いの愚かさの連鎖の結果が今の惨状だ。「愚かさの連鎖」をこれまでやり続けてきた人々のことだ。これからも愚かなことをやり続けるのだろう。本当の結末はいつ、どんな形で訪れることになるのだろう。それを思うだに身の毛がよだつ。

問題は、今や最終的な決定権がほんの少数の者の手に握られていることだ。最早、「民主主義」は機能しなくなってしまったのか。最早、無辜の民に出番はなくなってしまったのか。最早、民衆はただ固唾を呑んで見守ることしかできないのか。

## 「チャランケ」考

そんな折、私は一編の詩集を改めて手に取った。題して『ウクライナ青年兵士との対話』―著者は「土橋芳美」。元来、詩の世界に疎い私は、この詩人がこの世界でどのような地位を占めているのか知らないし、また、この長詩の「詩」としての出来栄えがいかなるものか、判断する目を私は持たない。だが、読後には心に沁みるものがあった。その思いを手繰ってウクライナで今進行中のことを考えた。

語り手の詩人はアイヌの老婦人―ある朝「涙の音」に目を覚ますと、傍らに一人の青年が苦しげに座っていた。それはウクライナの戦争で瀕死の重傷を負ったウクライナの青年兵士であった。傷のあまりの痛さに意識を失い、魂だけがこうしてここ―「サッポロ市ツキサム」に飛んできたのだった。

アイヌの老婦人とウクライナの青年という取り合わせには、胸に「ストン」と落ちるものがある。アイヌの民もウクライナの民も、共に、比べることもできないほどに力の差のある圧倒的な強者の抑圧のもとで、それぞれの歴史の開闢以来といってもよい程の長きにわたり、呻吟してきた人たちだからだ。今日の日本にあって、ウクライナの人たちと心底連帯できるのは、アイヌの人たちと、それから、沖縄の人たちだけだろう。

アイヌの老婦人はウクライナの人々のために朝に夕に、神さまに祈った。「この戦争が　早く終わりますように　ウクライナの人々が　穏やかな日常を　一刻も早くとり戻せますようにと　祈って　祈って　祈っていたの」

青年の魂をここに呼び寄せたのは、この「熱い祈り」であった。青年は語る。「今　ウクライナの空は　一面赤い塵埃に　覆われています　孔雀色した　美しい空が　消えました　森では　無惨にも　ぼくと同じように樹々が内蔵をみせて　倒れています」「美しい森はもうありません」「戦争は　ただ　ただ　破壊です　憎悪のはてしない連鎖です」

でもね、と老婦人は青年兵士に語る―「アイヌ民族に」「チャランケ　と　いう方法があるの」

「チャ」は「言葉」、「ランケ」は「下ろす」―「つまり相手の心に　納得のいく　言葉を下ろしあうの」「三日三晩はおろか　お互いが　納得するまで　えんえんと続けたっていうの」そうしたことは「個人でも　あるいは民族や国と呼ばれる　集団でも　工夫すれば　出来ることじゃないのかしら」

そして、老婦人は、プーチンとゼレンスキーが「チャランケ」したらいいのに、と思う。「この二人に　向きあってもらい　三日でも　四日でも　二人が真摯な言葉を　下ろしあうのよ　今　周りで　はらはらしながら　見守っている国々が　制裁ではなく　このアイヌ式の　チャランケ　チャ　言葉　ランケ　下ろす」「そういう　話しあいの場を　設けることを　すべきだと思うの」

誠に「夢」のようなお話だ。「現実」を「リアルに」論ずる者たちは、このような「夢」を「荒唐無稽」と一蹴するだろう。だが、そうした人たちがいずれかの立場から是非善悪を言い立て合う「理知の言葉」によって、今、何が解決するというのだろうか。「言葉を失うことが戦争なのね」と老婦人は言う。だが、ここに言う「言葉」とは、「理知の言葉」ではないだろう。どんな言葉を失うことによって今の惨状があるのだろう。

「ロシア兵も　ウクライナ兵も　そう　死んではいけない　殺してはいけない」

素朴な言葉だが、私たちも今やこのような言葉を「祈り」を込めて叫ばねばならないのではないだろうか。

「ロシア兵も　ウクライナ兵も　そう　死んではいけない　殺してはいけない」

（長縄光男、横浜国立大学名誉教授）

（初出）『詩と思想』2023年1・2月合併号